



コーちゃん・オーちゃんの 「見つけた！豊岡元気人」



月2回公民館で「麦わら教室」の講師を



江戸時代の麦わら細工店(協力:森貞淳一さん)



麦わら細工年表と図録を持つ前野さん

「麦わら細工年表」史に

わが人生を重ねて

城崎麦わら細工技術者の会会員(6人)で、このほど完成版「麦わら細工年表」を出版した達者な男性を紹介します。

前野治郎さん(89歳)城崎町湯島

麦わら細工職人の前野治郎さん。城崎町史の編集が進むころ麦わら細工だけの年表作成を思い立ちます。「合い間にワープロで打ってほしい」と町役場の町史担当者に原稿を託し、昭和58年2月初版発行。57歳でした。

その後版を重ね、今年4月に増補改訂された第五版では、年表に加え、麦わら細工に関する事項が網羅されています。

8月に開かれた「麦わら細工年表学習会」での語りに加え、前野さんの歩んできた道を紡ぎます。

江戸時代・麦わら細工史

麦わら細工は約300年前、江戸時代の享保年間(1716〜36)に誕生しました。因州(鳥取県)の住人「半七」(生年不詳(1731))という人が、湯島(城崎町)に来訪。療養中の慰めに、また宿賃の足しにと色とりどりに麦わらを染めて、こま、竹笛などの玩具に貼り付け、店先に並べて訪れる浴客の土産にしたのが始まりと伝えられています。

ただし、年表の最初の記事は半七伝説の約百年前。「但馬

国城崎から農民で麦わら細工をよくするものが来て大森(現東京都大田区)に住んだ」という大田区史に掲載された文書から始まっています。「大田区大林寺の過去帳には半七のころと同じ『享保年間』に城崎の記述があるようです」と、誤りか正しいのかさっぱり分からずと首をひねります。

宝暦13(1763)年に発刊された、旅行ガイドブック「但州湯島道中独案内」(城崎文芸館蔵)には麦わら細工が土産物として掲載。天保12(1841)年作の「但州城崎名所麦藁図繪【写真参照】」に、にぎわう店頭風景が残されています。

文政6(1823)年から5年間日本に住んだシーボルトが数十点の麦わら細工を収集。「平成16年にミュンヘンの博物館でその作品に対面したとき、小関さん、わしら、これを作るかなあ」と江戸時代の職人に思いを馳せ感慨ひとしおだったそうです。

「自分史」と「課題」を語る

中国天津で終戦を迎えた前野さん。戦地で足の病気に

かり、城崎の医者に「日にち薬」と言われ、「家でぶらぶらしていた」といいます。

それを見かねた、土産物店主に「他の無職の若者6〜7人と共に雇われ、麦わら細工の達人・森明さんから教えを受けたのが21歳ごろだった」と振り返ります。森さんは小筋師(麦わら細工のデザイナー)の一つ。幾何学模様の指導者で、前野さんも小筋を極めます。花鳥風月などを貼る模様師からも教えを受け習得。昭和37年に独立開業しました。

昭和50年代に、テープ状の麦わらを同時に数本、任意の幅に裁つ道具・キカイを改良。「効率アップとなり『革命的だ』と言われた」と誇らしげ。また、公民館で「麦わら教室」が始まり講師となりました。

今一番の課題は「麦わらの入手先」。岡山県笠岡市から入手不能後、南但を経て現在は奈佐地区の1カ所。来年は出石で栽培を試みるそうです。「炬燵」の上に作品を置いて眺めるような余裕は「まだない。先の話」とのことでした。

春炬燵 麦藁細工 桑細工 京極花陽

ま ち の 話 題

モンゴルサマー〜夏のおもいで〜
国と世代を超えた熱い交流!

8月21日と22日、日本・モンゴル民族博物館(但東町中山)で、関西在住のモンゴル人留学生らと地元小学生が交流する「モンゴルサマー」が開催されました。

交流を通じて、但東の魅力を発信し、子どもたちに国際感覚を身に付けてほしいとの思いで、豊岡市商工会青年部但東支部が主催し、約40人が参加しました。

参加者は、博物館内を見学した後、モンゴル相撲を体験し、移動式住居・ゲルを組み立てました。また、夜は、モンゴル料理を食べ、花火を楽しむなど、両国の文化を満喫し、有意義な時間を過ごしました。



▲ベンチに腰掛け、月見を楽しむ観光客

9月8日、城崎温泉街で、中秋の名月に合わせて月見飾り(主催・豊岡市商工会城崎支部・まちづくり委員会)が行われました。太鼓橋と七つの外湯には団子とススキを装飾。また、大谿川沿いには影絵ボックスが置かれ、観光客の目を楽しませました。鹿野勇作委員長は「温泉情緒のあるまちに影絵ボックスなどの雰囲気のあるものを加え、観光客をもてなしたい」と話しました。神戸市から家族3人で遊びにきていた島田真紀さんは「温泉街で、浴衣を着て歩いている人も多く、雰囲気があって良かった」と満足そうでした。

月見飾り

中秋の温泉街(ついで)



▲協力してゲルを組み立てる参加者たち

笑顔の輪

神鍋の風のように多彩に魅力的に
神鍋火山太鼓
 風恋(かぜこい)

夜の神鍋高原に楽しそうな太鼓の音が響きます。音に誘われ旧西気小学校体育館に入ると、練習していたのは「神鍋火山太鼓」風恋の皆さん。

太鼓は初心者でも、神鍋を元気に発信したいという思いは誰にも負けません。経験不足を熱意で補い、結成して1年間で、イベントへの参加は10回を超えました。

名前の由来を尋ねると「年間を通じていろんな風が吹く神鍋高原をイメージしたもので、神鍋に恋してほしい」という気持ちで込めた」とのこと。

その後、活動を通じて知り合った近隣の太鼓団体や、神戸の和太鼓松村組の指導を受け、技術に磨きをかけ、今では地元のイベントに欠かせない存在です。演奏に対するこだわりは、みんなで楽しく演奏すること。



▲演奏から楽しさが伝わってきます

活動の発端は、西気地区の区長会で地域活性化を目的に太鼓を購入したこと。太鼓を使って、西気から神鍋全体を盛り上げることに。平成23年の2月に結成しました。メンバーは、太鼓の初心者ばかりでしたが、文化祭などで太鼓の指導をしていた田村寛さん(日高町伊府)の指導の下、手探り状態で活動を開始しました。

今後は、正統な太鼓の演奏はもちろん、他の楽器と組み合わせた演奏も行いたいとのこと。さらなる活躍が期待されます。見学や出演の依頼は、代表の北村泳子さんまで。

☎ 45-10531